

B型肝炎ワクチンの接種について

◆B型肝炎について◆

B型肝炎ウイルスは、慢性肝炎を起こし、肝硬変・肝細胞がんの原因となり得るウイルスとして知られています。感染は主にB型肝炎ウイルス保持者(キャリア)の血液で非経口的に汚染されることによって生じます。母親がB型肝炎ウイルス保持者である場合、妊娠中あるいは、多くは出産時に母親の血液によって胎児あるいは新生児がウイルスの感染を受けます(母子感染)。さらに、血液に接する機会が多い医療従事者などでは、針刺し事故(汚染事故)によって感染する場合があります。成人がウイルス感染を受けると、約30%の人が急性肝炎として発病します。その予後は一般に良好ですが、約2%は劇症肝炎となり、そのうち約70%は死亡します。子どもはウイルスなどから身体を守るしくみである免疫機能が発達していないためウイルスを排除することができず、キャリアになる危険性が高く、慢性肝炎に移行しやすいといわれています。また、血液を介してだけでなく、唾液等の体液による感染も報告されていますので、集団に入る前の予防が重要です。

◆ワクチンの特徴と副反応◆

組換えDNA技術を応用して産生されたB型肝炎ワクチンです。基礎免疫をつけるには一定の間隔で3回の接種が必要です。副反応は、注射部位の疼痛、腫脹(はれ)、硬結(しこり)、発赤、そう痒感、熱感などがあります。さらに稀な副反応については、診察の際に直接医師にお問い合わせください。

◆予防接種を受けるときの注意◆

- ①接種時に立いて嘔吐する可能性がありますので、接種前30分は食べたり飲んだりするのは避けましょう。
- ②気温や来院前の運動により体温が37.5℃を越えた場合は、しばらく待って測りなおすことがあります。時間には余裕を持ってご来院ください。
- ③予診票が接種する医師への大切な情報です。よく読んで正確に記入してください。

◆予防接種を受けることができない人◆

- ①明らかに発熱がある人(37.5℃を超える人)
- ②重篤な急性疾患にかかっていることが明らかの人
- ③過去にB型肝炎ワクチンの接種を受けて、アナフィラキシーを起こしたことがある人(他の医薬品投与でアナフィラキシーを起こしたことがある人は、接種を受ける前に医師にその旨を伝えて判断を仰いで下さい。)
- ④その他、医師が予防接種を受けることが不適当と判断した人

◆予防接種を受けるに際し、医師とよく相談しなくてはならない人◆

- ①心臓病、腎臓病、肝臓病や血液の病気などの人
- ②発育が遅く、医師、保健師の指導を受けている人
- ③風邪などのひきはじめと思われる人
- ④予防接種を受けたときに、2日以内に発熱のみられた人及び発疹、じんましんなどのアレルギーを疑う異常がみられた人
- ⑤薬の投与又は食事で皮膚に発疹が出たり、体に異常をきたしたことがある人
- ⑥今までにけいれんを起こしたことがある人
- ⑦過去に本人や近親者で、検査によって免疫状態の異常を指摘されたことのある人
- ⑧妊婦又は妊娠の可能性のある人

◆予防接種を受けた後の注意◆

- ①B型肝炎ワクチンを受けたあと30分間は、急な副反応が起こることがあります。医療機関にいるなどして、様子を観察し、医師とすぐに連絡をとれるようにしておきましょう。また、ワクチン接種の副反応を正しく判断するために、接種後30分間は飲食(授乳)を控えてください。
- ②接種部位は清潔に保ちましょう。接種当日の入浴は差し支えありませんが、注射した部位をこするようなことはやめましょう。
- ③接種当日はいつも通りの生活をしましょう。激しい運動や大量の飲酒は避けましょう。
- ④万一、高熱やけいれんなどの異常な症状が出た場合は、速やかに医師の診察を受けてください。